

4- 2 生物相別

(1) 植物相

新潟県は、日本列島のほぼ中央の日本海側に位置し、日本有数の多雪地帯である。南方系、北方系の植物がみられるほか、日本海側多雪地域特有の植物など、非常に植生が豊かである。そしてその中央に位置する三条市は、平野部、里山、奥山とさまざまな環境があり、それぞれに特徴的な植物相がみられる。

ア 平野部

ここでみられる植物はほとんどが外来種である。田畑の雑草、園芸種が逸出したもの、緑化用に導入したもの、街路樹などがごく普通にみられる。特に特定外来生物であるオオキンケイギクは道路沿いに多くみられ、今では里山にまで進入するかのような勢いである。さらに要注意外来生物のセイヨウタンポポ、アメリカセンダングサ、セイタカアワダチソウ、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギにいたっては道路から狭い路地に至るまでの隅々にまで入り込んでいる。これらの外来種は在来種をおびやかしている植物であるということを認識することが大切である。

イ 里山

里山は、人の手が入った山や雑木林、棚田や小川など、多様な環境がある地域である。セイタカアワダチソウやアメリカセンダングサなど外来種もみられるが、比較的在来植物も残っている。下田地区は日本海側多雪地帯を代表するブナ・ユキツバキ群落地域である。また、オオバクロモジ、ユキゲニミツバツツジ、ヒメアオキ、ヒサカキ、エゾアジサイなど、日本海側特有の樹木が自生する。さらに、カタクリ、コシノコバイモ、コシノカンアオイなども代表的な野草である。これら林床の植物は、定期的に人が手をいれ、光が入るような林でなければ花を咲かせることができない。さらに、三条市の花であるヒメサユリは、環境省のレッドリストで準絶滅危惧種に、新潟県では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。また、シャガに似た小型の花を咲かせるヒメシャガは国、県とも準絶滅危惧種に指定している。どちらも限られたところにしか自生しない希少種である。同様に、貴重植物として人気のあるキンラン、ギンランは今も盗掘が後を絶たない。里山の自然を守るためには市民一人一人の心がけが大切である。



カタクリ



コシノコバイモ

ウ 奥山

下田地区には福島県と接する八十里越をはじめ、阿賀野市や魚沼市など雪深い地域に挟まれた奥山がある。日本を代表する豪雪地帯で、ここも日本海側多雪地域特有のブナ・ユキツバキ

群落地帯となっている。ほとんど人が入らない、手付かずの自然が残っており、サワグルミ、カツラ、ミズナラ、ゴヨウマツ、アカマツなどの天然林がみられる。また、加茂市との間にまたがる栗ヶ岳には、その山の名前が付いたアワガタケスミレがあり、三条市を代表する希少な植物となっている。

このように三条市の植物は、平野部においては外来種が大勢を占めているが、多様な環境のある里山や、あまり人の入ることのない奥山には豊かな自然が残されている。この豊かな植生が底辺となりさまざまな生き物を支えている。私たちはこの恵まれた豊かな自然を活かし、楽しみ、大切に、後世まで残して行きたいものである。

(2) 昆虫相

今、地球上で一番繁栄している生き物は昆虫類だといわれている。

三条市には、田んぼ、畑地、河川、里地里山、奥山と変化にとんだ環境がある。それぞれの環境に適合した昆虫がすんでいる。

ア 甲虫の仲間

カブトムシ、クワガタムシの仲間、カミキリムシの仲間、コガネムシの仲間など硬い鞘羽を持ち里山の広葉落葉樹林を主なすみかとする。広葉落葉樹林の林床を歩き回る飛べない昆虫オサムシの仲間やゴミムシの仲間など色々な種類の甲虫が確認されている。

人間の経済活動の変化により里山の手入れが行われなくなり、里山環境も昆虫にとって快適なすみかと言えない様子がみえ始めている。

イ トンボの仲間

トンボの幼虫であるヤゴは水の中で育つので、水環境はトンボの発生にとって重要な条件である。流水を好むトンボ、止水を好むトンボがいる。流水を好むトンボでは、オニヤンマ、コオニヤンマ、ヤマサナエ、カワトンボ、ハゲロトンボなどが代表種である。止水を好むトンボとしては、ギンヤンマ、ルリボシヤンマ、ショウジョウトンボ、シオ



アマゴイルリトンボ

カラトンボ、アキアカネ、ナツアカネ、ノシメトンボ、イトトンボの仲間などが観察されている。しかし、池や沼、湿地などの減少に伴い、止水域を生活の場とするトンボの数も減っている。田んぼや田んぼを取り巻く用排水路を主な発生源としていたアキアカネ、ノシメトンボ、シオカラトンボなどがその数を減らしている。稲作方法の変化や農薬使用の影響があるのではないかと推測される。

アマゴイルリトンボは吉ヶ平の奥にある雨生池で発見された樹林性のイトトンボである。林間にある湧水のあるきれいな水の池で発生する。発生地が限られており準絶滅危惧種に指定されている。

ウ バッタやキリギリスの仲間

トノサマバッタ、クルマバッタモドキ、ショウリヨウバッタ、オンブバッタ、ヒシバッタ、コバネイナゴなどは堤防の法面や農道のような明るく開けた草原でよくみられる。キリギリス、ツユムシの仲間、ウマオイ、クサキリなどは草の生い茂った草薮が好きだ。

エ チョウの仲間

チョウの幼虫は、そのほとんどが植物を食べて成長する。植物の分布はチョウの分布に大きく影響する。広葉落葉樹林の林床に生えるコシノカンアオイを食草にして育つギフチョウは、三条市の里山では普通に見られるが、県では準絶滅危惧種に指定している。



ギフチョウ

スマレの仲間を食草にしているグループがある。黄褐色の地色に黒点をちりばめたヒョウモンチョウの仲間だ。ミドリヒョウモン、ウラギンヒョウモン、オオウラギンシジヒョウモン、クモガタヒョウモン、メスグロヒョウモンなど里山を中心に河川敷でも見られる。

落葉広葉樹林にはコナラ、ミズナラを食樹とするアカシジミ、ウラナミアカシジミ、ウスイロオナガシジミ、オオミドリシジミなど森の妖精と呼ばれるシジミチョウが発生する。

オ その他

布施谷川上流部では県下でも2か所でしか発見されていない ナベブタムシがみつまっている。体長9mm程度の円くて平たい体（鍋蓋）で、幼虫も成虫も水中で暮らすカメムシの仲間である。山際の農薬などの汚染度の低い川底が拳程度の石で出来た小河川が発生に適した環境である。

参考文献

「三条市大崎山の昆虫調査目録」（1999.9.25～2010.12.31）越佐昆虫同好会報 92 号別冊

「五十嵐川流域（信濃川水系）のチョウ目録」（1998）越佐昆虫同好会報 78 号

「五十嵐川流域（信濃川水系）のトンボ目録」その2(2003) 越佐昆虫同好会報 88 号

「五十嵐川流域（信濃川水系）のバッタ・カマキリ・ナナフシ類目録」（2004）同上 90 号

「新潟県三条市の甲虫類目録」（2008）越佐昆虫同好会報 99 号

「レッドデータブックにいがた」（2001）新潟県環境生活部環境企画課

（3）鳥類相

鳥には一年を通して同じところにとどまるもの、子育てや越冬のために東南アジアやシベリア、あるいは北極圏などから渡って来るもの、また季節によって高い山から低い山に移動するもの、さらには長い旅の途中に立ち寄るものなどがある。

鳥は自分に合った良い環境が得られないと、過ごしやすい環境を求めて移動してしまう。したがって、鳥が生息する分布や個体数を調べることにより、環境の状態や変化を知ることが可能で

あり、そのため環境調査の有効な指標となっている。

鳥は種類によって水辺や林の中、あるいは草地といった住み分けを行っており、田んぼや里山、河川、奥山などの場所にはそれぞれの環境に合った鳥が生息している。

ア 田んぼ

田んぼや用水路には小魚や両生類、あるいは昆虫などが生息し、また秋の稲刈り後には落穂もあり、鳥は季節ごとにそれらの餌を求めて飛来する。

春になると田んぼには長旅の途中のムナグロが数百羽の群で餌をとりながら羽を休め、また子育てのために渡って来たアマサギも姿を見せるようになる。

冬を迎えると越冬のために渡ってきたハクチョウの群が落穂をついばみ、カラスもまた数十羽の群となり餌をとるようになる。やがて雪で地面が覆われてしまうと、雪が積もらない用水路などでアオサギやコサギなどの他、ハクセキレイや渡り鳥のツグミなどが餌をとっている。



オオルリ



キビタキ

イ 里山

里山には多くの種類の樹木があり、多くの昆虫や両生類も生息している。鳥はそれらや木の芽、木の実を餌としながら生息している。里山の林の中では天敵から身を隠すこともでき、様々な鳥がそこで巣作りや子育てをする。

ここでは一年を通してシジュウカラ、ヤマガラなどのカラ類や、アオゲラやコゲラといったキツツキ類、それにヒヨドリやカケスなどが生息しているが、春になると繁殖のためにオオルリ、キビタキ、クロツグミ、センダイムシクイなどの夏鳥が渡って来て、一斉に美しいさえずりを聞かせてくれる。

一方、冬になるとツグミ、カシラダカ、アトリ、マヒワといった冬鳥が渡って来るので、一年を通して多くの鳥の姿をみることができる。

ウ 河川

河川や河川敷では小魚や水草などを餌とする水鳥や、草地を好む鳥などが生息している。

一年を通してカルガモやセグロセキレイ、イカルチドリ、それにキジなどが生息しているが、春になるとヒバリが上空でさえずり、キジも大きな声でなわばり宣言をし始める。さらにツバメやイワツバメも飛び交うので、急ににぎやかになる。

冬になるとマガモやコガモ、ハクチョウなどが川面で羽を休め、カワアイサやカイツブリが餌をとるために潜水を繰り返している。

平成25年に下田地区の森町地内に「白鳥の郷公苑」が整備され、多くの人々が快適にハクチョウの観察が出来るようになった。また五十嵐川と信濃川の合流点には数多くのカモ類が越冬しており、良い観察地となっている。

エ 奥山

広大な奥山は豊かな自然に恵まれ、多くの動植物を育んでいる。特に多様性に優れた生態系が広い面積で保たれている所では、その頂点に立つイヌワシの生息が可能であり、現在、下田地区の大谷ダムの奥地では繁殖も確認されている。

同じくここには春になると、他の鳥の巣に卵を産みつけて育てさせる（託卵）ホトトギス、ツツドリ、ジュウイチなどのカッコウの仲間が渡って来る。またカワセミの仲間であるアカショウビンの神秘的な鳴き声も聞くことができる。

さらに下田地区の名勝地、八木ヶ鼻には小型の猛禽、ハヤブサが生息しており、毎年春になるとその絶壁を利用して繁殖を行っている。

（４）動物（哺乳類）相

ア 中、大型哺乳類

三条市内でみられる哺乳類（中型～大型）について、三条、栄地区ではニホンノウサギ（亜種：トウホクノウサギ）、ホンドタヌキ、ホンドテン、ムササビ、ホンドキツネ、ニホンイタチ、ハクビシン、ツキノワグマ（亜種：ニホンツキノワグマ）が挙げられる。



ニホンザル

両地区でこれらの動物がみられる地域は大崎山やトリムの森、しらさぎ森林公園周辺の里山環境が中心だが、ニホンイタチは主に五十嵐川などの河川周辺に生息している。ホンドタヌキやハクビシンは比較的人間の生活環境近くに生息し、民家や農地に侵入して悪臭や家屋の損傷、農作物の食害などを発生させることもある。

下田地区では上記８種に加え、ニホンカモシカ、ニホンイノシシ、ニホンジカ（亜種：ホンシュウジカ）、ニホンザル（亜種：ホンドザル）、ニホンアナグマが確認されている。

近年、これらの動物は徐々に生息域を拡大しており、ニホンザルの群れについては平成 25 年度現在、中浦、新屋、森町、牛野尾、名下、北五百川集落まで出没が確認されている。ハナレザルについては落合、原、荒沢、笹岡、飯田集落や三条地区の大崎浄水場付近などでも目撃情報がある。ニホンカモシカは基本的に奥山に生息するが、棚鱗、小長沢、駒込、曲谷集落などでも痕跡や目撃情報がある。

ツキノワグマについては、三条地区で平成 22 年度的大量出没年に 1 頭が捕獲され、栄地区では同年に痕跡が発見された。また、平成 24 年度にも三条地区の二ツ山集落でツキノワグマの目撃情報があり、大崎山周辺を生息域にする個体がいると思われる。下田地区については平成 18 年以降、ほぼ全域にわたって痕跡や個体が目撃され、三条、栄地区よりも圧倒的に目撃件数が多い。近年は奥山



ツキノワグマ

に帰らず、里山に生息する個体もいると考えられるため、ハイキングや山菜採りなどで里山に入るときには鈴の携帯など自己防衛が必要である。

ニホンイノシシやニホンジカは多雪の新潟県には生息しないとされてきたが、近年では下田地区各地でニホンイノシシの足跡や目撃情報、捕獲の記録がある。また、ニホンジカについては長野、大谷地集落などで目撃情報がある。

イ 小型哺乳類

三条市の小型哺乳類については調査がほとんど行われておらず、データが不足しているため生息域や生息種の詳細は不明であるが、ニホンリスは三条市内全域の里山や奥山で広くみられる。

データがあるものだけ挙げていくと、三条地区ではコキクガシラコウモリ、エチゴモグラが確認されている。

下田地区ではアズマモグラ、カワネズミ、ヒミズ、クロホオヒゲコウモリ、ヤチネズミ、ミスネズミ、アカネズミ、ヒメネズミが確認されている。

(情報提供：下田猟友会(三条猟友会下田分会))

(5) 外来種

ア 植物

春には、たくさんの外来植物が、農道で、グラウンドで、家庭菜園で花を咲かせている。代表的なものは、オオイヌノフグリ、ヒメオドリコソウ、セイヨウタンポポ、シバザクラ、パンジーなどである。

夏の土手には、ヒメムカシヨモギ、アレチマツヨイグサ、シロツメクサ、オオキンケイギクなどが目をひく。秋には、セイトカアワダチソウが黄色い絨毯^{じゅうたん}のように広がっている光景がみられる。これら外来種は群落をつくることが多く、在来種を圧迫している可能性がある。

イ 動物

アメリカザリガニ、ウシガエルなどは早くから日本に定着し、三条でも奥山を除くほとんどのゾーンで確認されている。オオクチバス、コクチバス、ブルーギルなどの魚類は特定外来生物に指定されている。この3種の魚類は笠堀ダム、大谷ダムでは定着が確認されており、信濃川・五十嵐川・新通川でも定着が確認されている。これらの魚類は魚食性が強く生態系への影響が懸念される。

飼育していた外来種が逃げ出したり、飼いきれなくなつて放置されたと思われる例としてカミツキガメが下田地区で見つかったりしている。ミシシippアカミミガメも八幡公園の池、本成寺の池、五十嵐川・新通川でも定着が確認されている。動きが速いためイシガメ、などの在来種を圧迫している可能性がある。

ウ 昆虫

昆虫では、子どもに大人気の外国産のクワガタムシが飼育かごから逃げ出し、日本在来のクワガタムシとの交雑が心配される。